
星虫

朱鷺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星虫

【Nコード】

N5849J

【作者名】

朱鷺

【あらすじ】

絶対。約束。

シュウが、ずっとそこについてくれるなら。

綺麗なものの全部を、シュウにあげようと思った。

赤いマフラーが目印みたいに、ジャングルジムの上。かつてわたしの首に巻かれていたそれは、いつの間にかシュウの愛用品になっていた。

コートのポケットに両手を突っ込んで、一番上でぼんやり夜空を眺めている彼を見上げる。

「ねー、風邪、治らないよ」

昼頃まで三十九度近い熱にうなされていたくせに、こんな寒い中外に出るなんてまったくもって信じられない。せつかく人が心配して掛けた言葉なのに、案の定シュウには届いていない。

「てかさー、こんなとこまでついて来るなよ」

気の抜けたような、だるそうな声が、人の好意を台無しにする。

「もったいないのー」

「なにが」

「めったに見せないわたしの優しさだったのに」

「はあ？」

意味わかんね。てか、バカ？みたいな目線が空から降ってくる。上手く避けることも出来ないで、真っ直ぐ突き刺さって。一瞬間へ

こむ。こう見えて、わたしは意外と打たれ弱いのだ。

「ねー、楽しい？」

「はあ？」

「そこ、楽しい？」

「別に」

年月を経て錆びた鉄。そっと手を触れたら冷たかった。もっと大きくなかったっけ？ジャングルジム、きちんと見上げたのは小学生以来な気がした。

ブーツのままで足を掛けてみる。カン、と。夜の寒さのずっと先にまで、一本線を引いたみたいで、小さな音がした。

「うわっ、結構怖いね」

登りきった場所の不安定さ。思わずシュウに掴まった。地面はそれほど遠くないのに、落ちた時の痛みを想像して顔をしかめた。

ジャングルジムから伝った冷たさに、手の感覚が少しだけ麻痺している。息を吹きかけたけれど、簡単には温まらなかった。

見上げれば、明るい夜が広がっていた。月はポツカリと宇宙をくり貫いていて。無数の星の穴が散らばっている。

「意外とカラッポなのかもね」

「なにが？」

「宇宙」

「はあ？」

「なんとなくだよ。なんとなく」

「ふーん」

「本当だよ？」

「疑ってねーし」

「でも、胡散臭がってる」

「あ、バレた？」

別になんにもまずくないって声で、シュウが意地悪いみたいにして笑った。だから、なんにも嬉しくなかった。足を蹴ってやりたいと思ったけれど、ブーツが脱げそうだったからやめてあげた。

「ほら、やっぱりわたしって優しい」

「はあ？」

「こっちのハナシ」

「あっそ」

吐く息が白い。ハア、って。空気の中で溶けていくのを見るのがとても面白いと思った。どれだけ息を吐き続けられるか、一人で競争した。十二秒しかもたなくて、たぶんわたしはわたしに負けた。もっともっと寒くなったら、もっともっと白くなるのかと思ったら、もっともっともっと寒くなっても、それはそれでいいかもしれない。

わたしはふと、シュウの額に手をやった。わたしの手が冷たすぎたのか、シュウの額はひどく熱い。

「やっぱり、寒くならなくていいや」

「なに？」

額に置いてあるわたしの手を気にすることもない、シュウの疑問符。

「ねえ、まだ下がってないんじゃない？」

額から手を離しても、手のひらの中心がじんわりと熱をもっていた。

「それか、また上がってきたか、どっちかな。」

シュウは言っ、どっちに賭ける？なんて聞いてきた。

「それ、賭けたらいいことある？」

「うん。たぶん」

「たぶん？絶対じゃなくて？」

「じゃあ。絶対」

「なら、賭ける。」

即答のわたしに、「単純な奴」とシュウが笑った。

「やっぱ無理。オレ、なんもあげれるもんねーもん」

「そうなの？」

「そうだろう？」

「……わかんない」

シュウにもらったら嬉しいもの、頭の中に思い浮かべようとしたけれど、今わたしが欲しいもののほとんどは、シュウからもらわなかつた嬉しいものばかりだった。

じっと見つめたら、なにか思いつく気がして、シュウのことをじっと見つめてみる。

けれど、シュウがそこにいることが、なんだか嬉しくて。思わず笑ってしまった。

「は？なに。なんでそこで笑うわけ？」

「なんでもないよ」

「なんか企んだだろ、今」

「ううん。」

「ろくでもねーことだろ」

「ううん。きっと、嬉しいよ」

「はあ？」

分からない、とシュウは顔をしかめる。仏頂面、小さい頃から全然変わらないのがおかしかった。

「わたし、降りる。ここ寒い。」

指先まで、冷たいのが這い上がった。背筋から震えるみたいに、夜が包み込んでくるから。早く帰らないとって。すごい思った。

登ることも怖かったけれど。降りることも同じに、怖い。足を踏み外さないように、慎重にジャングルジムを降りていく。記憶の中の小さなわたしが、足場を三段残して先に飛び降りていく。

「ムリムリムリ」

昔のわたしは、きっと相当に勇敢だった。すごいなあ、なんて。今更。小さな頃のわたしを讃える。

シュウが、ほんの少しだけ心配顔で、わたしが降りるのを見守っていてくれた。いた。

地面に足がついて、ほっと一息をつく。ジャングルジムに向かっ

てピースをしたら、「バーカ」って声が降ってきた。

「ねえ。そのマフラーわたしのだって、知ってる？」

コートのポケットに手を突っ込んで。さっきみたいにシュウを見上げた。

「当たり前だろ」

さっきよりは気の抜けていない声が返る。

「わたしね、すごい気に入ってたんだよ」

「だから、なに」

「すごいすごい気に入ってたんだよ」

「あつそ。でも、いいんだよ。お前のものはオレのものなんだから
言い切って、シュウもジャングルジムから簡単に降りてきた。

「てか。早く帰れ。こんなとこまでついてくんじゃねーよ。風邪引きのくせに」

今度はシュウがわたしの額に手を当てた。

「お前こそ下がってねーんじゃねーの？」

「違うよ。上がったんだよ」

「バーカ」

「うつしたのシュウだよ。わたし、風邪なんて引いてなかったのに」

キスしたら、風邪がうつるって。シュウが元気になるかもって。ちょっと面白そうと思っていたのに。シュウの風邪が治ることはなくて、今度は二人そろって風邪引きで。なんだつまんないね、って今朝メールで送ったら、くだらないこと考えてないで早く寝ろ、って。メールですら怒られたことを思い出す。

シュウの趣味って、怒ることかもしれない。なんでもないのに、いつもぶっきらぼうだから。だから、みんながシュウのことちょっと怖がっているのを知っている。

「うっせーよ」

シュウは、一瞬照れたみたいな顔をして、わたしの頭を軽く小突いた。

「帰るぞ」

そして、冷たすぎて感覚のない手をギュッと握ってくれた。シュウのもってる、熱。手のひらを通して伝って。

「ねえ、やっぱりシュウも熱下がってないね」

「まーな」

「なんで外出たりしたの？」

「だって、お前ついてくるじゃん」

「うん。ついてきちゃったね」

「だからだよ」

「ちょっと怒ってたくせに」

「熱出てるのについてくるからだろ」

「じゃあ、わたしどうすればよかったの？」

「わかんねーよ。まあ、いいじゃん。会えたし」

「……うん。まあ、いいか」

「そう。いいの」

「そっかそっか」

公園を横切る二つの影を、ジャングルジムが見送った。わたしとシュウを追い駆けたみたいな月が、その光をどんどん増して。夜の空が明るくなっていく。たぶん、あそこの電灯を壊したとしても、わたしがなにも怖くないくらいには、明るい。

シュウがわたしを見つけたのは、あのジャングルジムの上からだった。まだジャングルジムがあまりに大きかった頃。雨上がりの虹の下だったなら素敵だったのだけれど。その日はただひたすらに青

が広がっていた。

ゆっくりと流れる雲を見上げていたのだった。わたしにはそれがひどく面白いことだったのだけれど、公園にいたどんな子も雲になんか興味は持っていないくて。滑り台やブランコや砂場や鉄棒などの遊具の方がずっと面白いみたいだった。

「お前、昨日泣いてたろ」

降ってきた声。やっとわたしが雲から目を離したのが、その瞬間で。太陽があまりに眩しくてシュウの顔をきちんと見られなかった。

「学校で、泣いてただろ。泣き虫」

誰なんだろうとか、思う間もなくシュウはそこにいた。わたしのことを知らないシュウは、わたしよりもずっと先にわたしを見つけていた。

かくれんぼに負けたぐらいに悔しいと思ったのは、それからずっと後のことで。

本当は、わたしが先にシュウを見つけられたらよかった。

「だって、生きてないって、言うから」

「なにが？」

そっと指差した。真っ直ぐの上。

「雲？」

「生きてないんだって。先生が言ってた」

「生きてないのが、嫌だったのか？」

「ううん。すごーくつまらないと思ったの」

「はあ？」

「すごいすごいつまらないと思ったの」

「つまらないと、お前泣くの？」

「だって、面白くないでしょう？」

生きてるわけじゃないじゃない、と言った先生の顔を思い出して、わたしは少しだけ嫌な気持ちになる。先生がわたしを見つめた目の意味が、いい意味じゃないことくらい、簡単にわたしが分かっていたことを、たぶん先生は気が付いていない。

シュウが、初めて。やっと、ジャングルジムの上からわたしを見た。しかめたわたしの顔が面白かっただけなのかもしれないけれど。とにかく、シュウは笑っていて。その笑顔がすごく好きだと、わたしは思った。

「いいよ」

シュウが、言った。

「オレ、お前の味方になってやってもいいよ」

何を思ったのか唐突に。なんにも迷わないで、シュウが言った。

空気がそこにある意味と同じことのように、その言葉は発せられていて。当たり前みたいに。無条件に。裏切らないで。その言葉を、わたしの心に簡単に放り投げて。だから、わたしが泣きたくなったことは、本当にどうしようもないことで。全部、シュウのせいなのだった。そこに産まれた感情の全部は全部、シュウのせいなのだった。

太陽が眩しかったけれど、わたしは必死で。必死で目を開けようとしていた。シュウの顔を、もっともっとちゃんと見たかった。

「じゃあ、じゃあわたし、世界で一番綺麗なものを見つけたら、一番最初に教えてあげる」

「はあ？」

「本当だよ。絶対。約束するから」

「約束？ じゃー、ぜってー破るなよ」

なにかを伝えたくて。なにかを今すぐあげたくて。嬉しい気持ちの全部をシュウに分かって欲しかった。

上手な気持ちの一つもなくて。そんなのだけじゃ足りないって、思うのに。それでもそれが精一杯で。もっと泣きそうになりながら、シュウに大きく頷いてみせた。

絶対。約束。

シュウが、ずっとそこにいてくれるなら。

綺麗なものの全部を、シュウにあげようと思った。

だから、わたしが見つけた綺麗なものの全部をシュウは知ってる。全部を覚えているかは知らないけれど。

ふらふらしている足取りかもしれない。なにせ、少しずつ頭がぼんやりしてくるから、全然わからなかった。熱が、じっと額で疼いて。夜の冷たいのがちょうどいいのかもしれないと思うのに、さっきよりもきつと、風邪の具合はずつと悪い。

シュウが引いてくれる手。まかせっきりにして、わたしは星空を見上げた。

「虫なのかも」

「はぁ？」

呟いた言葉に、シュウが振り返った。

「きらきら光る虫なのかも。本当は、羽がついてたりして。同じところ、ぐるぐるぐるぐるしてるの」

「なに、その設定」

「違うよ。そういう虫なの」

「星が？」

「だったらいいね」

「面白いから？」

「うん」

家の明かりが見えてきた。もうシュウと別れなければいけない。心のどこかが必死に抵抗するみたいに、足を重くしようとする。

ずっと繋いでいられたら嬉しいのだけれど。熱のこもったシュウの手を、もつとずつと離さないままでいられたら嬉しいのだけれど。バイバイの言葉の意味は、それをするためにあるのだと思うから、わたしたちはやっぱりバイバイと手を振ることをしないといけないのだった。もつとも、シュウは、手を振り返してくれたりなんかしないけれど。

シュウに出会ってから、実は欲しいものが沢山増えた。シュウからもらったら嬉しいものが、実は沢山沢山あったりする。だけど、その全部はわたしの願いで。だから、絶対に口に出したりはしない。願い事を口に出したら叶わないって、いつか誰かが言っていたから。

ちゃんと寝ろよ、とシュウが言った気がした。わたしはうん、と頷いた気がした。

夜が、静かに静かに響いていた。

ふと目を開けると、見知った天井が瞳に映った。

布団の中から、カラッポになったみたいな片手を出した。シュウの熱はもう、どこにも残ってはいなくて。

額をじりじりと焼いていたような熱は、完全に冷めてしまったようだ。

カーテンの向こうが、ほの明るい。もう、朝なんだと思った。

伸ばした手で、カーテンをわずか開けてみる。眩しい光が一筋、部屋の中へ入り込む。

目を細めた瞬間に、零れた涙、一滴。

「シュウ」

呼んでみたけれど、彼がそこにいないことは分かっていた。

冷めてしまった手を握り締めた。なにを掴めた感触もなくて。だから、すぐに開いてしまった。

耳鳴りがする。朝の空気が鳴いている。あたためられた部屋の中。手放された片手だけ、ただやたらと冷たくて。

早くシュウに会えればいいのに、と。

再びの夢際に立ちながら、ただひたすらに願っていた。

f
i
n.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5849j/>

星虫

2011年10月6日17時00分発行